

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：52501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K02432

研究課題名（和文）新潟市新津美術館所蔵・坂口安吾旧蔵書の調査に基づいた創作原理に関する総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Ango Sakaguchi's Creative Principles Based on a Survey of the Former Collection of Ango Sakaguchi in the Niitsu Museum of Art, Niigata City

研究代表者

加藤 達彦（KATO, Tatsuhiko）

木更津工業高等専門学校・人文学系・教授

研究者番号：70321403

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では新潟市新津美術館に保管されている坂口安吾の旧蔵書を再調査し、旧蔵書に残された文献・資料が安吾の思想や作品に及ぼした影響を追究した。

調査の結果、草稿やメモ等の新たな発見はなかったが、1996年の調査に基づいた『坂口安吾蔵書目録』からの異同や誤り等を確認することができた。また、坂口安吾の読書方法や傍線の付け方、メモの特徴も把握でき、その成果を中間報告として公表した。

さらに文献調査を踏まえながら、安吾が生きた時代状況や作品背景を相対的に捉え直し、研究代表・分担者それぞれの関心に即して諸テキストを分析し、研究発表を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

坂口安吾の旧蔵書については、1996年の調査以来、その全貌を再点検する機会はほとんどなかった。そうした経緯において、今回、旧蔵書の全体をあらためて見直し、『坂口安吾蔵書目録』の異同や誤り等を確認できた学術的意義は大きい。さらに『坂口安吾蔵書目録』のデジタルデータの更新版や引用文献との紐付け作業が完成すれば、文献・資料に基づく実証的な研究やインターテキストualな安吾の創作原理を具体的作品に即して追跡していくことがより容易な形で可能となる。

また旧蔵書の調査結果をデジタル・アーカイブの形で公開できれば、坂口安吾や地域の文化財に関心をもつ一般市民に向けた情報提供ともなり、社会的意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：In this study, we re-examined Ango Sakaguchi's old collection of books stored at the Niitsu Museum of Art in Niigata City to determine how the documents and materials in the old collection influenced Ango's thoughts and works.

As a result of the research, we did not find any new drafts or notes, but we were able to confirm the differences and errors from the "Sakaguchi Ango Library Catalogue" based on the 1996 research. We were also able to grasp the characteristics of Ango Sakaguchi's reading method, the way he added bylines, and his notes, and published the results of this research as an interim report.

Based on the literature survey, we also relatively reconsidered the circumstances of Ango's life and the background of his works, analyzed various texts in line with the interests of each of the principal investigator and co-researchers, and presented our findings in a research presentation.

研究分野：日本近代文学

キーワード：日本近代文学 坂口安吾 旧蔵書 間テキスト性 創作原理 デジタル・アーカイブ

## 1. 研究開始当初の背景

「無頼派」を代表する作家の一人・坂口安吾の作品群は、没後 60 年以上が経った現在でも、幅広い年齢層で非常に多くの読者を獲得している。学術面においても安吾のテキストは各大学・高等専門学校等の研究者、大学院生、あるいは文芸評論家などによって盛んに取り上げられ、研究会や討論会等で常に活発な議論を巻き起こしてきた。

このように坂口安吾を取り巻く多方面からの隆盛は、斬新なテキスト分析や作品読解へと着実に結実しており、その一端は、たとえば、半藤一利『坂口安吾と太平洋戦争』(2009・2、PHP 研究所) 原卓史『坂口安吾 歴史を探偵すること』(2013・5、双文社出版) 宮澤隆義『坂口安吾の未来 危機の時代と文学』(2015・2、新曜社) などの書籍でも確認することができる。また、研究代表者の加藤達彦と研究分担者の山崎義光、両者が会員として所属している坂口安吾研究会は 2000 年に発足して以降、途切れることなく定期的に研究会を開催し、継続して機関誌も発行している。

以上のような坂口安吾をめぐる学術的状況は、小説や評論、エッセイなど多岐にわたる安吾のテキストが、今なお現代社会にコミットするアクチュアルな問題を孕んでいる証左であり、それゆえ彼の残した言葉に真摯に向き合い、さらなる精緻なテキスト分析を通じてその新規性・批評性を探っていくことは意義深いことだと考えられる。

そうした状況下、近代文学研究は文学理論の弱体化も相俟って、必然的に対象作品を同時代的な文化・思想史のなかで捉える「言説研究」が主流となりつつあり、坂口安吾に関する研究も先に挙げた研究書籍等に明らかなように同様の傾向にあったと言える。

そこで坂口安吾が各作品の執筆当時において具体的にどのような文献や資料を入手し、それらをどう読み解き、また多様な言説をいかに取捨選択しながら自らのテキストに反映させていったのか、言わば、安吾の文学観や創作手法の形成過程の追究につながる実証的調査があらためて必要であるという着想に至った。

こうした安吾の創作原理に関する基礎研究は、意外にもこれまで統一的には検討されておらず、未だ不十分な状態にあると断じざるを得ない。同時代の言説に注目した基礎的な文献・資料調査は、時間と経費がかかるだけに実際には難しい側面もあるが、先述した「言説研究」・文化・思想史研究をより確実に強固なものにするためにもこうした作業は大変に重要であると考え、本研究を立案・計画した次第である。

### 参考文献

- ・半藤一利『坂口安吾と太平洋戦争』(2009・2、PHP 研究所)
- ・原卓史『坂口安吾 歴史を探偵すること』(2013・5、双文社出版)
- ・宮澤隆義『坂口安吾の未来 危機の時代と文学』(2015・2、新曜社)

## 2. 研究の目的

上述したように、近代文学研究は「言説研究」が主流となりつつあり、坂口安吾に関する研究も同様の傾向にあると言える。

しかしその一方で安吾については、晩年に残された約 1,200 冊にも及ぶ貴重な蔵書と草稿・メモ類が新潟市新津美術館に保管されているにも関わらず、そのほとんどが十分に調査されていない状況にあった。これらの蔵書に関しては、先に文芸評論家の若月忠信氏をはじめとするグループが 1996 年に調査し、『坂口安吾蔵書目録』(1998・8、新潟市文化振興財団発行)にまとめられているが、このときはどのような資料が残され、いかなる書き込みがなされているかということを確認・整理したレベルにとどまっている。

そこで本研究では、こうした先行調査の成果を踏まえながら、あらためて安吾の蔵書に関する再調査を行い、その上で実際に残されている文献・資料が、のちの安吾の思想やテキストにいかなる影響を与え、具体的にどのように作品にいかにされていったのか、さらにはそうした「間テキスト性」が安吾の文学観や創作原理の形成にどのように関与したのかを追究することを第一の目的とした。

また、あわせて安吾が参考にした文献自体を他の資料や文学テキスト等と比較検討することを通じて相対的に時代状況や作品背景を考察する視座を設定し、安吾の思想やテキストを同時代的な文化・思想史的な文脈のなかで総合的に捉えなおすことを本研究の発展的な目的として位置づけることにした。

本研究に関しては、長年、安吾の蔵書・資料の整理と保管に従事されてきた新潟市芸術文化振興財団の岩田多佳子学芸員に研究協力者としてご助力を請うことができない、さらには安吾のご子息である坂口綱男氏からも協力を得ることができた。こうした好条件のもと、ご遺族の意向や所蔵機関の許可が得られれば、現在残されている安吾の貴重な蔵書や文献・資料等に解説を付し、

デジタル・アーカイブとして広く市民に公開していく作業にも着手し、その可能性を探ることとした。

#### 参考文献

・『坂口安吾蔵書目録』(1998・8、新津市文化振興財団発行)

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究の方法と計画

本研究では新潟市新津美術館に保管されている坂口安吾の旧蔵書を調査することで安吾の文学観・思想形成につながる創作原理を追究することを目指した。

そのため頻りに現地を訪れて蔵書・文献を再分類し、貴重な資料を中心に写真等の記録メディアに保存しながら、安吾自身による書き込みをもとに個々のテキストとの対応・影響関係を実証的に考察するという方法を採用した。

研究計画として初年度は、安吾自身による書き込みのある文献を中心に調査を進め、翌年度以降は蔵書資料をジャンルごとに分け、挿絵や写真等の視覚・表象文化にも注目して同時代的な思想背景を考究する。そして最終年度に向け、研究の成果報告として重要文献・資料に焦点を合わせたデジタル・アーカイブの構築・公開に向けた準備を展開することとした。

#### (2) 研究組織と役割分担

本研究では代表である加藤のほかにも2名のサポートが得られた。その主な役割分担は以下の通りである。

##### 加藤達彦(研究代表者)

坂口安吾研究のプロパーとして、安吾の蔵書・資料や挟み物、書き込み等から読み取れる交友関係を明らかにし、実際に残されている文献と作品との影響関係を実証的に追究する。また、蔵書・資料から窺われる視覚文化的要素にも着目し、安吾テキストを表象文化論的なアプローチから再解釈し、その思想の特質について考察する。

##### 山崎義光(研究分担者)

これまでの雑誌・地域メディア研究で培った日本近代思想と文化に関する幅広い知見をもとに安吾の蔵書・資料を思想史的な観点から相対的に捉えなおし、安吾テキストを同時代的なコンテキストのなかに位置づけてその特質について考察する。

##### 岩田多佳子(研究協力者)

新潟市芸術文化振興財団に勤務し、これまで実際に安吾の蔵書・資料の整理と保管にあたってきた経験から特に注目に値する文献や書き込み等に関する情報の提供と記録メディアへの保存、資料公開に向けた準備の支援を担う。

#### (3) 研究遂行のための3ステップ

上の役割分担とも重なるが、本研究の目的遂行のために次に掲げる三段階のステップを計画した。

##### 新潟市新津美術館に保管されている蔵書と草稿・メモ類の再調査に基づく安吾の創作原理と作品への影響関係を探る研究

こちらに関しては、限られた時間内に着実に成果を上げるために安吾の書き込みが見られる文献と安吾の作品に言及があるものを優先的に取り扱っていく。

##### 安吾が参照した文献・資料そのものを同時代的な枠組みのなかで検討する比較文化・思想史的研究

こちらに関しては、安吾が残した文献・資料以外のテキストにも広く視点を移し、文学だけでなく、当時の政治・社会・文化状況、あるいは経済的な観点も勘案し、より大きな思潮のなかで安吾のテキストを相対的に捉えなおしていく発展的な研究として位置づける。

##### 調査・研究で明らかになったことを中心に安吾の残した文化財をデジタル・アーカイブとして公開するための準備作業と文理融合的な応用実践的研究

こちらに関しては、関係者・所蔵機関と協議を重ねながら、情報工学等専門家の助言を仰ぎつつ安吾の書き込み、草稿・メモ類を中心に最良の公開方法を検討していく。

以上の3ステップは と順に進んでいくのが理想的だが、所蔵機関の状況や資料保管担当者、研究分担者の他業務等も考慮し、臨機応変に と を同時並行的に行っていくことを想定していた。

ところが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、研究期間の後半は現地での実物調査がなくなり、結果的に国立国会図書館や近隣の図書館等での資料調査をもとに を軸に研究を

進める計画・方法に切り替えることとなった。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究遂行上の困難

本研究を遂行する上で、想定外のいくつかの困難が生じた。その一つは研究代表者の加藤達彦と研究分担者の山崎義光、研究協力者の岩田多佳子氏3名のスケジュール調整が予想以上に難しかったことである。というのも、当然のことながら、安吾の旧蔵書が収蔵されている新潟市新津美術館は定期的に一般向けの美術展を開催しており、その準備や片付け等の入れ替え時期には収蔵庫への立ち入りが制限された。

また、岩田氏は「安吾風の館」の展覧会も企画されており、そちらの準備にかかる時期には調査協力を依頼するのが憚られた。旧蔵書が保管されている新潟市新津美術館の収蔵庫は、岩田氏が管理されており、文献・資料の保管棚には岩田氏しか立ち入ることができないため、美術館・岩田氏双方のスケジュールが合わないときは、実地・現物の調査を断念せざるを得なかった。

研究遂行上の困難の2つ目として、想像以上に旧蔵書の文献・資料の傷みが激しかったことが挙げられる。そのため文献・資料は数点ずつ、棚から机に運んでいただき、限られた時間のなかで慎重に頁を繰って書き込み等を確認するという作業が精一杯であり、その場で各文献の本文を読み込むということは不可能であった。

また、当初は旧蔵書の文献・資料等をジャンルごとに分けて、年度ごとに調査する予定であったが、収蔵庫の保管棚がジャンルごとの整理になっていなかったため、そうした方法・手順は非効率的であることがわかり、棚ごとにまとめて調査を進める形に計画を変更した。

以上の2点に加え、2019年度から新型コロナウイルスの感染が拡大し、国内においても緊急事態宣言が発出され、外出や移動が制限される事態となった。そのため加藤・山崎ともに外泊を伴う県外への出張、調査旅行が実質的にできなくなってしまった。新津美術館への一般立ち入りも難しくなり、結果的に2019年度以降は現物を確認することがかなわなかった。

##### (2) 研究の主な成果

上のような状況のなか、頻度は限られてしまったが、現地での調査に基づいて坂口安吾の読書方法や傍線等の付け方、メモ書きの特徴を把握することができた。その成果を中間報告として、加藤は『木更津工業高等専門学校紀要』第55号(2022・1)にレポートを執筆・公表した。

現地での現物調査が困難となって以降、加藤・山崎は研究と調査の方法を切り替え、『坂口安吾蔵書目録』に掲載されている文献を中心に国立国会図書館や近隣の図書館、古本屋等での資料調査を行い、同時代的な言説を踏まえた比較文化・思想史的研究を進めていった。その成果として、加藤・山崎それぞれに坂口安吾や周辺作家について、主要テキストの読解・分析を行い、各々が所属する学会や研究会等で機会を得て研究発表や報告等を行った。

本研究の後半期間は新型コロナウイルス感染拡大に伴い、現物調査が困難となったものの、研究協力者の岩田氏とご子息の坂口綱男氏のご協力のもとデジタル写真を駆使して資料閲覧が可能となったため、結果的に現在、収蔵されている旧蔵書のほぼすべての書影と傍線や書き込み等のある箇所を確認することができた。その過程でこれまで知られていなかった草稿やメモ等の新たな発見はなかったが、『坂口安吾蔵書目録』に掲載されていない文献や逆に紛失のせいか、所在がはっきりしない文献等がいくつか見つかり、『坂口安吾蔵書目録』の異同・誤り等を整理することができた。

現在は本研究の延長上で『坂口安吾蔵書目録』を検索可能なデジタルデータに変換し、今回判明した新情報を踏まえて更新作業を行っている。加えて『坂口安吾蔵書目録』のデータに『国文学・解釈と鑑賞別冊 坂口安吾事典〔事項編〕』(2001・12、至文堂)に記載されている、坂口安吾の作品内で言及・引用されている文献情報「引用事典」の紐付け作業を並行して行っており、最終的に「蔵書目録」の更新版を作成するとともに「蔵書目録」と「引用文献」の双方向の検索ができるデータファイルを構築する予定である。

##### 参考文献

- ・『国文学・解釈と鑑賞別冊 坂口安吾事典〔事項編〕』(2001・12、至文堂)

##### (3) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

坂口安吾の貴重な蔵書コレクションは、これまで世間にあまり知られることなく、一部の文献調査・研究は個々の研究者によって進められたものの、若月忠信氏の1996年の調査以来、その全貌を再点検する機会はほとんどなかった。そうした経緯において、今回、旧蔵書の全体をあらためて見直し、『坂口安吾蔵書目録』の異同を確認できた意義は大きい。

また現在、進めている『坂口安吾蔵書目録』のデジタルデータの更新版や引用文献との紐付け作業が完成すれば、文献・資料に基づく実証的な研究やインターテクスチュアルな安吾の創作原理を具体的な作品に即して追跡していくことがより容易な形で可能となる。

さらに『坂口安吾蔵書目録』が再整備されれば、残された文献・資料を精査するだけでなく、

同じ時期に安吾が参照可能であったにも関わらず、蔵書目録には残されていない他資料やテキストと比較することを通じ、安吾の思想の特徴を同時代的な文化・思想状況のなかで相対的に捉えなおしていくこともできるはずである。

#### (4) 今後の展望

加藤は引き続き『坂口安吾蔵書目録』のデータ更新の作業を行っていく予定である。

それと併行して旧蔵書の文献・資料から考察される安吾作品への影響関係や安吾に特徴的な創作原理の究明、あるいは安吾に関わる周辺作家の文学的嘗為等について加藤・山崎の双方で連携をとりながら個別に研究を重ね、学会・研究会での発表、学術誌への投稿を積極的に推進していく。

また所蔵・保管機関等の許可を得られれば、関係者と協議を重ねながら、蔵書・文献資料の調査結果をデジタル・アーカイブの形で公開し、インターネット等を通じて広く社会・国民に向けて発信する方途を摸索していきたい。

加藤が所属・勤務している工業高等専門学校は、身近に情報工学の専門家がいることから、そうした環境の強みを活かし、デジタル・アーカイブの構築・公開へ向けた具体的な知見や技術について教示・助言してもらおう予定である。

こうした試みが奏功すれば、坂口安吾以外の文学者や思想家たちの貴重な資料や文献、遺品類を公開していく際の一つのモデルケースとしての意義も有すると考えられる。今後も粘り強く実現に向けて尽力していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 加藤 達彦	4. 巻 第55号
2. 論文標題 坂口安吾・旧蔵書の調査研究に関する中間報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 木更津工業高等専門学校紀要	6. 最初と最後の頁 101～106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19025/bnltk.55.0_101	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎義光	4. 巻 4号
2. 論文標題 墮落論の論理と世界連邦論 「続墮落論」を起点に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 坂口安吾研究	6. 最初と最後の頁 14-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎義光	4. 巻 第73集
2. 論文標題 林房雄における1930年代の浪漫主義的転回 小説『青年』前後	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部紀要 人文科学・社会科学	6. 最初と最後の頁 85-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山崎義光
2. 発表標題 報道の時代のなかの島木健作『満洲紀行』
3. 学会等名 日本比較文学会・2020年度東北大会（日本比較文学会東北支部）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 加藤達彦
2. 発表標題 真相究明のナラトロジー 「安吾巷談」と「明治開化 安吾捕物」を中心に
3. 学会等名 2018年度 日本近代文学会秋季大会 パネル発表「戦後文学における 現実 の表象と理論」
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎 義光  (YAMAZAKI Yoshimitsu)  (10311044)	山形大学・地域教育文化学部・教授    (11501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------